

現代社会における「グループ」の意味と 福祉社会への展望への一試論

An essay of “group” in modern society and
a perspective of well-being

市 東 賢 二

Kenji Shito

要 旨

現代社会において個人と社会のかかわりをいかに捉えるかということは、大きな問題になっていると言えるだろう。本論においてはそうした問題を「グループ」として取り上げる。「グループ」とは、単に集団を言い表すわけではない。確かにその概念的な理解として集団を表している場合が多いようであるが、個人と社会の問題を考察する際にはそれでは足りない。むしろグループをどのように生きるかということを明らかにすることによって、人間における個人と社会の二重性、つまり人間の社会的事実性を明らかにし、そのことによってアクチュアルな「グループ」が明確化される。

そのことを明らかにすることによって社会を問い返し、社会福祉 (social welfare) と人間の well-being の実現される福祉社会への展望が開かれるのではないかと考える。人間の well-being が実現される福祉社会を理念的な理想社会に留まらせることなく、現前する社会として捉えるための一試論である。

キーワード：グループ，リアリティ，アクチュアリティ，
私的な次元—社会的次元，社会的事実性，well-being

はじめに

われわれは現在、否が応でも個人と集団とのかかわりを考えざるを得ない。それは、医療や社会福祉の領域で語られるチームアプローチの問題を始め、教育や家族にいたるまで、それと意識しなくとも考えざるを得ない問題である。

そうした問題は、個人と集団の問題をどうした視点から捉えるのかということと密接にかかわりがある。それは集団において明確化される個人、同時に個人において概念化される集団という二重性を生きる人間の姿を捉えることの重要性を明らかにすることでもある。個人と集団

の関係は社会学的な見地から名目論、実在論または両者の立場を含むような社会有機体説としても扱われる。しかし人間の実存から集団を捉える必要がある時期にきているのかも知れない。それは、それぞれの理論的整合性の確かさを証明しあうようなことではないが、現実社会的生を生きる人間の社会性や個別性、さらには他者との「実存的コミュニケーション」(Jaspers, K.)の問題である。それはまた、social well-beingとしての人間の生を問うことにもなるかと考える。

さらにまた、こうした視点から社会それ自体を問い返す必要もあると考える。このことは social welfare と well-being の関係を問い返すことでもあり、社会を、社会を生きる人間から捉えかえすことでもある。この social welfare を社会福祉、人間の well-being が実現される社会を福祉社会とするならば、現状における社会福祉から福祉社会への流れを、どのように理解できるだろうか。福祉社会 (well-being) を人間の生の実存的なレベルから捉えかえすならば、むしろ人間一人ひとりの実存としての well-being と、その well-being の実現へと向かう social welfare との相互関係を見い出すことができるのではないかと考える。

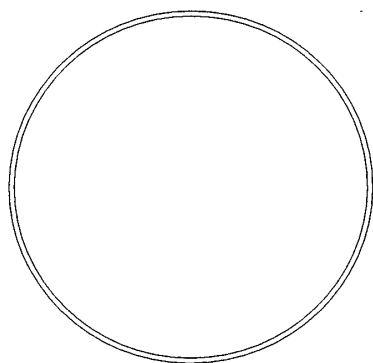
1 グループなき社会＝現代

本論では、はじめにのなかで示したような視点から、人間の生きる二重性を「グループ」として概念化しようと試みる。ここでの「グループ」という概念は、単に小集団ということの意味するものではない。集団または小集団をあらわすものとしては、集団主義的集団やチームといったものがまず思い出される。集団主義的集団とは、ここであげる「グループ」とは全く正反対のものであるといっても過言ではない。集団主義的集団とは、フロム (Fromm, Erich) が『自由からの逃走』の中であげるような、ファシズム (全体主義的集団) の分析に半ば通づる集団である。その特徴は集団への帰属であり、それは、人の孤独感、無力感から生み出される自由の重みへのたえられなさから生まれるということをあげることができるだろう。こうした集団はその集団への帰属意識をその集団の構成員が自らのアイデンティティーとしてしまう。それは同時に、他の構成員との違いのあるかかわりを生きることを拒否してしまう事態を引き起こしかねない。この集団は、当然のことながら自らを見失い、自ら以外の何ものかへ同化しようとする同一集団となってしまうだろう。

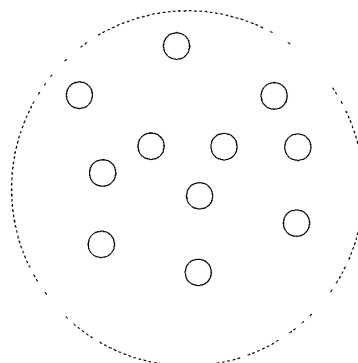
これに対して、チームとは竹内靖雄がその著『チームの研究』¹⁾で述べているように「チームとは、まず、あるプロジェクトを達成したいという個人が、自らリーダーとなって必要なパートナーやメンバーを集め、仕事をする事で形をなすもの」²⁾なのであり、「チームを作るには単独でも自立できるような人間が集まらなければダメ」³⁾なのでであると述べる。つまり、同じ集団という形態をとっていたとしても、その内実は、大きく集団主義的集団とは異なっていることになる。それは多分にチームという「あるプロジェクトを達成」するというその目的性によるものであろう。こうしたことを個人と集団という観点から下図のように示すことができるだろう (大円：集団枠、小円：個人)。下図のように集団枠と個人との関係を表そうとする意図は、集団主義的集団における個人の疎外や集団枠への逃避、つまり同一枠への依存が、個々人

の違いを忘却させる姿を、またはチームにおける集団と個人の姿、集団枠があることによって

集団主義的集団



チーム



集団枠はもとよりそれによって明らかにされる個人を端的に表そうとしたものである。

それではここでいう「グループ」とは一体どのようなものであるのか。グループの研究としては1930年代のクルト・レヴィン (Lewin, Kurt) のグループ・ダイナミクスの研究やコノプカ (Konopka, Gisela) のソーシャル・グループワークの研究等が有名である⁹⁾。ここでの「グループ」とは早坂泰次郎も述べるように単に技法としてのグループということにはあてはまらない¹⁰⁾。あくまでグループ体験としてのグループなのであって、グループ内体験（グループの構成員の個々バラバラな体験）ではない¹¹⁾。「グループ」とは単なる個人個人の集まりではない。むしろ人間の集団（ひいては社会）における個別化と、他者との違いを共有し、そうしたかわりを共に生きるという視点から概念化されることがらである。早坂がグループ体験という体験にそのグループの意味の基盤を与えようとするのには意味がある。それは事実という語の捉え方の違いに起因されると言えるだろう。その点について木村敏は次のように述べる。

「同じように＜事実＞といってもリアリティが現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場からいわれるのに対して、アクチュアリティは現実に向かって働きかける行為のはたらきそのものに関していわれることになる」¹²⁾のである。このことは、先のフロムによる正気の社会の言及にもあらわれていると言えるのではないか。フロムは、「正気の社会とは、食欲、搾取、所有、ナルチシズムといったものが、より大きな物質的利益や、個人的な威光を増大するために用いられる機会のない社会である。（略）個人が社会に関係することが、そのまま、それが個人的問題に関係することになり、仲間との関係は、個人的面での関係から切り離せないような社会である」¹³⁾と述べる。ここでフロムが述べる社会に、まさしくグループということが端的に述べられているといってもよいだろう。こうして様々な視点から集団（社会）が語られるという背景には、早坂のいう身体的な意味でのグループ体験¹⁴⁾が希薄になっているということが指摘できるのではないだろうか。こうしたことを踏まえ次節においては、集団を生きる個人の問題や人間存在における関係論的問題が明確化される必要があると考える。

2 社会的存在としての個人

前節の内容を踏まえ、人間の本来的な姿を端的に述べるのであれば、人間は社会的事実性を

生きているということが言えるだろう。このことを個人と集団ということから述べれば、集団（社会）において個別化される個人、同時に個人において概念化される集団（社会）という二重性を生きる存在としての人間ということになるだろう。それはクワント（Kwant, Remy C.）によれば、「人間はすべてにおいて社会的存在である」²⁴。この言葉を踏まえば純粹に私的な個人など存在しないことになる。ある特定の個人が存在すること自体が、極めて社会的なのである。この人間における個人と社会の事実性は、社会的事実性（social facticity）と名付けられる。クワントの哲学によれば、すべて人は他者を通しての存在なのであり、その他者を通すつながりが個人の生きる社会性に他ならない。

クワントのいうすべてという語は、人間の「自分自身を発達させることができる人間存在のすべての側面」²⁵を指している。しかしこうした中にあらわれる社会的という語を勘違いしてはならない。つまり、習慣的な二つの分類からなる「私的な次元—社会的次元」という区別に振り回されてはならない。クワントは次のように述べる。「われわれは、いわば人間の実践的である活動を『社会的』と呼ぶ」²⁶のである。人間のもっとも個別的に行う営みでさえ社会的なのである。つまり、ここでの社会的という語は、「人が他者と依存関係にあるということではなく、他者を通じて存在する」²⁷ということである。それはさらに「すべての本来の人間の活動は、秩序ある世界の意味の場と織あわされている。しかしそうした意味の場は、ただ他者や社会を通じてのみ、われわれの自由になる」²⁸のである。このことは、われわれの存在は「他者を通じての存在」であるのと同時に「他者にとっての存在」²⁹でもあるということである。これら二つの側面は一見相反するように見えることができるが、人間存在の相互性はこの二面性を指していると言えるだろう。例えば、ボランティア活動などは「他者にとっての存在」であることによって自らの存在を充足する（「他者を通じての存在」）という一つの例であろう。

しかしこうした議論は、われわれの「私的な次元—社会的な次元」という習慣的な区別を捨てさせるにはまだ足りないところがある。それは「多数の人間の共同相互存在、つまり人間の相互の連繋が共通のもろもろの経験や反応をその結果としてもたらす場合は皆、それを社会現象といってよからう。しかしこの連繋はただ、すべての個々の人が集団的連繋の中にとざされて、それによって包括されているということであって、集団の内部で、或る人と他の人の間になんらかの人格的關係が存在するという意味ではない」³⁰からである。「一般的には、特に人間の歴史の後代の歩みにおいては、集団の指導はむしろ純粹に集合的要素に主点を置き、そのために個人的な関係要素を排除する傾向に傾いている」³¹とブーバー（Buber, Martin）が述べていることにあらわれている。「集団的要素がもっぱら、或いはともかく優勢に支配しているところでは、人間は彼を孤独、生存の不安、喪失感から解放する集団性によって支えられるのを感じる」³²のである。このことはわれわれにとっての集団のある一面を的確に表現している。われわれは集団的要素によって孤独や不安、喪失感といったいわば危機体験から救われているかのように感じられる。

しかし、このことは前節でのフロムの指摘にもあったが、ブーバーは「現代人にとって本質的なこの集団性の機能の中では、人間の間柄、すなわち人格と人格との間の生は、集団的なも

のにおされて後退しているように思われる。集团的な相互共存 (Miteinander) は、個人的な相互対向 (Zueinander) への傾向を抑止することを心がけ¹²⁾ていることを指摘する。つまり、人間は独自に「私」であるという幻想から逃れることなしに、社会的存在としての人間に気づくことは難しいのである。人間の独自に「私」であるという幻想はわれわれをある時は孤独にし、不安にする。そのことから逃れるために集团的統一感に浸るのである。こうしたいわば集団性への埋没傾向は、あくまで「私的な次元—社会的次元」の習慣的区別の中で、私的な次元から社会的次元へと逃げ込むことができるという幻想（このこと自体は独自に「私」であるという幻想の裏返しであるが）の表れであろう。それというのも本来われわれの「個人的立場は、実際には集団のものの見方で」¹³⁾あって、「集団とはわれわれの存在の領野であり、われわれの『住み家』であり、われわれに安全の物差を与えてくれている」¹⁴⁾からである。しかし、習慣的の区別に縛られ続けるかぎり、あくまで集団（社会）は私的な次元にとってあたかも敵であるか、逃走場所でしかない。

こうした現代人のありようは、人間的な相互対向からしょうずるお互いを社会的に個別な存在であることを覆い隠してしまう。さらには個人と社会の関係のみならず、人間同士のかかわりにおいてもそうした傾向を見ることができる。それは人間関係という語をあくまで対象化されるものとして、つまり概念的リアリティとして捉えてしまうようなことである。次節においてはこうした現代社会における個体的なありようから、本来の人間のありようとして関係的人間の存在する社会への展望を述べてみたい。

3 福祉社会への展望

前節の最後に述べたような展望を述べるには、社会それ自体を問い返すことも必要である。このことは social welfare と well-being の関係を捉え返すこととなり、またそれは同時に社会自体を、社会を生きる人間という視点から捉え返すことでもある。social welfare を社会福祉、well-being を福祉社会とするならば、現状における社会福祉から福祉社会への流れをどのように理解することができるだろうか。人間を自覚的な人間意志から捉え、その発達を技術的に求め、技術的計算と技術的な構成によって発達段階的に捉えるのであれば、福祉社会の成立とはロマンティックな企て（ブーバー、M.）に留まり続けるだろう。ユートピアとはその語源が示すように現実にはあり得ない場所（Webster によれば utopia という語の語源は no place という意味である）を指し示す。つまり、ある手段を講じることによって段階的に発展し、現状で想定しうる理想的な社会を実現しようという試みは、「追求することがらにとって今ここで現在可能な場所をつくりだし、かくしてそれがのちに実現されるようにしなければならないと信ずる」¹⁵⁾ような社会をつくり出そうとする試みである。

こうした試みにおける未来社会は、過去との決別においてあらわれる現在性から表現される「今」から立ち表れる未来像である。それは日本語の「近代—現代」という語感にもよく表れているが、近代という伝統に対する新しさを強く意識するようなところから表れる。そうした「今」から見据えられる未来は、現在を過去から決別した時間として捉え、その違いを強調し

過ぎるが故にそれと知らずに過去から現在への継続性から見い出される可能性の一つであるか、もしくは想像であることに気づきにくく、それは必ずしも現前する将来の姿ではない。

このいわば知らずに過去との継続による現在から想像された未来像は、たとえそれが将来実現されたとしても、それはたまたまあたったに過ぎない。超人的な能力の持ち主でもないかぎり、それはあくまで現実から跳躍した想像に過ぎない。確かにメルロ＝ポンティも述べる通り、ある表現されたものの中には将来への予言が含まれている¹⁰⁰。しかしそれは、将来において表現されたものの中にその時点から見た過去（つまり現在）との関連を見出し得るということにおいて明らかにされることなのであって、決して現在から未来を予想し、想像するということではない。

こうした試みを企てようとする一つの背景は、現代人の生きる自然的態度において表れる、対象を目の前にした時の、常に「どうしたらよいか」という、いってみれば操作的な方法を求める態度である。こうした態度はわれわれの科学技術社会の産物の一つであるといえるだろう。こうした態度の内では一定の方法を選択することによって問題を克服し解決しようとしたり、目標を達成しようとしたりする。こうした態度をフロムは *technique* として表す。この *technique* としての態度はある事態に遭遇した場合、よりよい技術（*technique*）を求め、そのことによってさらなる段階へと向かっていくことができる、と信じることも可能である。そうであるからこそ、どうすればよりよい社会が実現できるのか問題にできるのである。しかしながら、ここで問題にされる社会は、必ず現在想定できる限りの社会であり、かつ決して現在の社会ではないのである。こうした議論は既に幾たびも繰り返され、片のついた発達段階の議論でありながら、われわれが *technique* としての態度から世界にかかわろうとすれば、いつでも復活しかねない企てなのである。しかしながら真の技術とは、*technique* としてだけ捉えるものではなく、*technique* をも含む *art* として捉える必要がある。フロムは愛するというものを「愛とは（略）愛の一つの『対象』にたいしてではなく、世界全体に対して人がどう関わるかを決定する態度、性格の方向性のことである」¹⁰¹と述べながら、愛することの技術を語る。フロムにとってここでいう技術とは『愛するということ』という著作の原題が“THE ART OF LOVING”であった通り、あくまで *art* なのであった。それは、フロムのいう技術とは「理論学習と習熟のほかに、（略）その技術を習得することが自分にとって究極の関心事にならなければならない」¹⁰²ものだからであるここで語られていることは、現在われわれが関心を持っていることを対象化し、われわれ自身の生きる世界から切り離し、操作的に関わろうとすることではなく、むしろそのことにコミットしていくこととしての技術（*art*）なのである。さきの *technique* としての態度と対比的に概念化するとすれば、*art* としての態度ということができよう。こうした態度は、まさしく現在を現在として生き関わろうとする態度である。フロムが、愛を人間の実存の問題に対する答えとしたのもこうしたことからであろう。

こうした態度から、社会を人間の生の実存的なレベルから捉え返すのであれば、むしろ人間一人ひとりの実存としての *well-being* と、その *well-being* の実現へと向かう *social welfare* との相互関係が見出せるのではないか。それは、今はまだ実現されてはいない現在想定しうる理

想的な未来社会を **well-being** の実現される社会として夢想するのではない。それは現在のわれわれの実存的な問題としての福祉社会を, **social welfare** という現実の働きかけとそこに表れる本来的な人間のありよう (**well-being**) をアクチュアルに問い返すことである。

以上のようなことから現代における福祉社会への展望は, まさにわれわれ一人ひとりがわれわれ自身として社会的に生きる姿を問い返そうとすることで見えてくるだろう。それは個人の具体的な社会的な生活の実現であり, 一人ひとりの顔の見える社会とはこうした社会を指すのではないだろうか。

おわりに

本論において取り扱った「グループ」とは, 説明概念としてのグループではなく, 体験の概念化されたものとしてのグループであった。それはこのようにグループを捉えることによって, 人間の生きる社会性の一端でも明らかにできるのではないかと考えたことから始まっている。しかしながら, この論文においては私自身の能力をこえた問題への言及もあり, 今後再び研究考察を重ねなければならないことを, まさに身を持って知らされた。特に人間の現実理解における **reality** と **actuality** はさらに吟味の必要があるだろう。また, 社会的事実性を生きる人間の現実への, 臨床哲学的な議論も必要であろうと考える。この論文のおわりにあたって以上のような問題点を今後の課題として掲げ, 論文を閉じることとしたい。

引用参考文献一覧

- ブーバー, M. 「人間の間柄の諸要素」『対話的原理Ⅱ ブーバー著作集2』佐藤吉昭 佐藤令子訳 みすず書房 1968
- ブーバー, M. 『ユートピアの途』長谷川進訳 理想社 1988 (Buber, M. *PFAD IN UTOPIA* 1950)
- フロム, E. 『自由からの逃走』日高六郎訳 東京創元社 1965 (Fromm, E. *Escape from freedom* 1941)
- フロム, E. 『正気の社会』加藤正明 佐瀬隆夫訳 社会理想社 1958 p.310 (Fromm, E. *The Sane Society* 1955)
- フロム, E. 『愛するということ』鈴木晶訳 紀伊国屋書店 1991 (Fromm, E. *The Art of Loving* 1956)
- 早坂泰次郎『人間関係の心理学』講談社現代新書 1979
- 早坂泰次郎『人間関係学序説』川島書店 1991
- 川田誉音編『グループワーク 社会的意義と実践』海声社 1990
- 木村敏『偶然性の精神病理』岩波現代文庫 2000
- クワント, R. C. 『人間と社会の現象学』早坂泰次郎監訳 勁草書房 1984 (Kwant, R. C. *PHENOMENOLOGY OF SOCIAL EXISTENCE* 1965)
- メルロ＝ポンティ, M. 『メルロ＝ポンティ・コレクション』中山元編訳 ちくま学芸文庫 1999
- 竹内靖雄『チームの研究』講談社現代新書 1999

辞書辞典類

Webster's Third New International Dictionary

現象学辞典 弘文堂

i フロム, E. 邦訳 1965

ii 竹内靖雄 1999

iii 同上 p. 5

iv 同上 p. 14

v この点については以下のテキストにわかりやすくまとめられているので参照されたい。

川田誉音編『グループワーク 社会的意義と実践』海声社 1990

vi 早坂はその著『人間関係学序説』(川島書店 1991)の中でグループを概念的リアリティから捉えることに終始するような視点だけではなく、身体的リアリティからグループを捉えることを自ら主催していたIPRトレーニングの体験から提言する。

vii グループ体験とグループ内体験の違いを、早坂は次のように述べる。

(グループ内体験という場合の)グループとはたんに伝統的なアカデミズム社会心理学の定義にもとづく概念上外見上の意味であるのに対して、(略)(グループ体験という場合のグループとは)文字どおりグループの体験そのものである。(略)すなわち(グループの)メンバー相互間にどんなに相互作用が成り立っており、仮に、そと目には共通の目標が成立しているようにみえても、それが相互性(おたがいのために)という、メンバー同士の感情や気持ちの交流の結果でないかぎり、いいかえれば、時間とともに動く感情や気持ちがそのまま共同体験されるのでないかぎり、グループはグループではない。

(早坂泰次郎『人間関係の心理学』講談社現代新書 1979 p.121-123)

viii 木村敏 2000 p.13

この指摘に対して先の早坂の身体的リアリティとしてのグループは身体的アクチュアリティとしてのグループと言い換えることができるかも知れない。

ix フロム, E. 邦訳 1958 p.310

x 早坂泰次郎は、「グループとは、『見る一見られる』存在としての人々の身体の間、『見る一見られる』関係が実際に成就される状態をいうのである」と述べている。(早坂 1991 p.253)

xi クワント, R. C. 邦訳 1984

xii 同上 p.69

xiii 同上 p.73

xiv 同上 p.80

xv 同上 p.81

xvi 同上 p.105

xvii ブーバー, M. 邦訳 1968 p.88

xviii 同上

xix 同上 p.88-89

xx 同上 p.89

xxi クワント 前出 p.140

xxii 同上

xxiii ブーバー, M. 邦訳 1988 pp.25-26

xxiv メルロ＝ポンティは歴史における制度を述べた論文の中で、その制度化について次のように語る。

(絵画の歴史における様式の制度化を語る文中で)画家の作品の一つずつが、後に続く作品を予告しているものであり、後に続く作品が自分と同じものになることをできなくしている。すべてが互いに支えあっているが、どこに向かっているかをいうことはできない。(略)だから一つ問題があるというよりも、絵画について「問い掛け」があるというべきである。この問い掛けがあるだけで、すべての試みに

共通の意味が与えられ、そこから一つの歴史がうまれるのだが、概念によってこれを予測することはできないのである。(「個人の歴史と公共の歴史における『歴史』」『メルロ＝ポンティ・コレクション』中山元編訳 ちくま学芸文庫 1999 pp.235-236)

xiv フロム, E. 邦訳 1991

xvi 同上 p.18